

# 特別な支援を要する幼児の早期スクリーニングに関する研究 ーインクルーシブな保育づくりの実践に向けてー

鈴木恵太・滝吉美知香・柴垣登\*、佐藤信・佐々木全\*\*、

千葉紅子・渡邊奈穂子・餘目陽子・小野章江・山本唯・

川村真紀・中上朱美・吉田美奈子・岩下マリ子・江刺梢・颯田由希子\*\*\*

\*岩手大学教育学部、\*\*岩手大学大学院教育学研究科、\*\*\*岩手大学教育学部附属幼稚園

(令和4年3月14日受理)

## 1. はじめに

インクルーシブ教育システムとは「人間の多様性の尊重等の強化、障害者が精神的および身体的な能力等を可能な最大限度まで発達させ、自由な社会に効果的に参加することを可能とする目的の下、障害のある者と障害のない者がともに学ぶ仕組み」(文部科学省、2012)であり、子ども達1人ひとりが多様であることを前提として、障害の有無に関わりなく、自分に合った配慮や支援を受けながら、地域の学校でともに学ぶことを目指すものである。この実現のために2つの点が強調される。すなわち「基礎的環境整備」と「合理的配慮」である。

「基礎的環境整備」は合理的配慮の基礎となる環境整備であり、通常の保育づくりにおいては、特定の個人に向けた支援や配慮の前提として行われるものであることから、クラス全体に向けた工夫が該当する。クラス全体の「参加と理解」を目指す工夫としては、ユニバーサルデザイン(UD)に基づく工夫が挙げられる。「合理的配慮」は障害のある個人を対象として、その障害の状態等に応じて提供されるものであり多用かつ個別性の高いものとされる。保育づくりにおいては、集団への分かりやすい支援といったUD化を前提として、個人をつまづきとその背景的特性に基づいた支援や配慮が挙げられる。

インクルーシブ教育は基礎的環境整備と合理的配慮から構成されるが、クラスや個人の特性に基づき、障害のある子どもを含む全員の参加と理解

を促すために段階的な支援を提供していくものである。ここにおいては、クラス/個人の特性を可能な限り早期に、かつ正確に把握することが、まずは重要となる。

さて、特別な支援を要する幼児には、自閉症スペクトラム障害(ASD)や注意欠陥多動性障害(ADHD)など発達障害の幼児が含まれる。発達障害の大きな特徴の1つに「併存症」がある。例えば、ASDの約26%はADHDを併せ持ち(Harin et al., 2019)、ADHDの約45%はディスレクシアを併せ持つ(DuPaul et al., 2009)と報告されている。このことは、ある障害にみられる症状が他の障害にも同様にみられること、あるいは、ある症状が複数の障害を反映している可能性を示唆する。Miniscalco et al., (2006)は、2.5歳時に専門家によって特異的言語発達障害(SLI)と診断された子どもたちを追跡調査したところ、7.5歳時において、その70%がADHDやASDなど他の発達障害と診断されていたことを報告した。つまり、発達早期の「言葉の発達の遅れや偏り」は言語面の発達だけでなく、その後顕在化する行動や社会性などの障害の初期徴候でもあることが示唆される。

発達障害においては成長の早期に発見し適切な対応を開始することの重要性が指摘されている。先行研究では、乳幼児期に適用できる発達検査やスクリーニングなど評価法に関するものや、幼児期の社会性スキルトレーニングやUD保育づくりに関するものが報告されているものの、いくつかの課題が考えられる。1つ目は、発達障害の併存

症を考慮したアセスメントに関するものである。多くのスクリーニングツールは全般的発達や行動面、コミュニケーション面など発達の領域に焦点化されているものが多く、発達障害の併存症や早期兆候を包括的に捉えるものは少ない。2つ目は、スクリーニングを起点としつつ基礎的環境整備と合理的配慮の観点を取り入れた包括的な教育支援モデルはほとんど提案されていないことである。これまでUD保育づくりや個別の支援の実践報告はみられるものの、スクリーニングと集団あるいは個別による支援を包括的に捉える実践は少ない。

インクルーシブ教育の効果的な推進にあたっては、発達特性を踏まえた支援ニーズを早期に捉えるアセスメントから集団や個別での支援や配慮を連続的かつ一貫して実践することが求められる。その実現のためには、乳幼児期における発達の特性を明らかにし、その特性を踏まえた支援ニーズを捉えるアセスメントツールを明らかとすること、そして効果的な支援について、基礎的環境整備と合理的配慮の観点を踏まえた支援方略をまとめること、そしてそれらを一体化させた教育支援モデルを構築することが必要である。

本研究では、その一歩として、幼児期における発達の特性とその早期スクリーニングについて理論的に明らかとする（研究Ⅰ）、そして、効果的な支援方略について、特に基礎的環境整備にあたるUD化の工夫について検討する（研究Ⅱ）ことを目的とする。

## 2. 研究Ⅰ：早期スクリーニングに必要な特性の理解と評価項目に関する研究

発達障害では、複数の障害が併存するために症状が重複することがあり、特に成長の早期では、それらの境界が明確ではないことが考えられる。したがって、発達障害のある子ども達へ適切に対応していくためには、ある症状や診断にのみ焦点化するのではなく、併存症を考慮した包括的な理解と対応を展開していくことが重要となる。

Gillberg (2010) は、発達の障害に共通する発達早期の徴候を包括的に捉える新しい概念である『ESSENCE (Early Symptoms Syndromes Eliciting Neurodevelopmental Clinical Examinations) (神経精神医学的／神経発達の診察が必要となる早期徴候症候群)』を提唱している。その定義は、全般的発達、言語・コミュニケーション、社会相互作用、運動の協調、注意機能、活動性、行動、気分、睡眠の領域における、3（または5）歳以前にみられる遅れまたは偏り」であり、「これら領域における1つあるいは複数の症状が6か月以上に渡って継続する」とされる。ESSENCEに含まれる発達の障害は、ASDやAD/HD、LD、発達性協調運動障害、知的障害などが挙げられ、それらの出現率は合わせて10%程度と想定されている。ESSENCEの概念は、後に顕在化していく発達の障害を一群の早期兆候として包括的に捉えようとするものであり、本研究を進める上で役立つ。全般的発達や運動、注意や行動、情緒や生活面など広く状態を捉えることで発達の特性を包括的に把握することが可能になると考えられる。

ESSENCEに基づいた行動スクリーニングとして全10項目からなるESSENCE-Qが開発されており欧米を中心に広く翻訳され使用されている。日本語版も作成されているものの、十分に確立されているとは言いがたいのが現状である。

行動スクリーニングとして、広く使われるものの1つにCBCL (Child Behavior Checklist) があるが、保護者が回答するもので質問が100項目ほどの構成であることから、必ずしも簡便に実施可能というものではない。スクリーニングとしては、行動や注意、情緒、社会性などの状態を広く捉えることで簡便に使用できる方法が望ましい。そのような行動スクリーニングとして、SDQ (Strength and Difficulties Questionnaire) (子どもの強さと困難さアンケート) が挙げられる。

SDQはGoodman (1997) によって開発され、欧米を中心に広く用いられている行動スクリーニング質問紙である。5つのサブカテゴリ（行為、

多動、情緒、仲間、向社会性)と向社会性を除く4つの合計からなる総合困難度(TDS)であり、子どもの強さと弱さを評価するものである(サブカテゴリの概要を表1に示した)。

表 1. SDQ のサブカテゴリの概要

	内容
行為	反社会的行動に関する行為
多動	不注意や多動性に関する問題
情緒	抑うつや不安など情緒に関する問題
仲間	友人関係の問題
向社会性	協調性や共感性など向社会的行動

SDQ は、教師版、保護者版、本人版の3種類がある(幼児版は教師版と保護者版の2種類)。質問は全25問で構成され、3件法(あてはまらない、ややあてはまる、あてはまる)によって回答する。得られた回答は得点化されるとともに、支援の必要性について「High Need」「Some Need」「Low Need」の3段階で評価される。

先行研究(例えば、Du et al., 2008; Blom et al., 2010)では、定型発達児の適応評価において、仲間関係と情緒の2つのサブカテゴリが内在化の課題を、多動と行為が外在化の課題を各々反映することが指摘され、また発達障害のスクリーニングにおいて、仲間関係と向社会性の2つのサブカテゴリがASDを、多動がADHDを、行為が素行障害を、情緒が抑うつ・不安障害の診断を各々予測することが指摘されている。これらはSDQが発達の障害の特徴を広く捉えることができることを示唆している。25問という質問項目と回答方法の簡便さを考慮すれば、行動スクリーニングとして利用性が高いことが期待される。

### 3. 研究 II : インクルーシブな保育づくりに関する研究

インクルーシブ教育は基礎的環境整備と合理的配慮から構成される。基盤となるのは基礎的環境整備であり、これは通常の保育活動が集団活動で進められることとよく適合する。したがって、特別な支援を要する幼児が在籍していたとしても、まずはクラスベースの工夫をすることで集団の中でクラスメイトとともに成長を促すことが望ましい。その上で、より個別対応が求められる課題に焦点化した対応を図ることが効果的と考えられる(図1)。

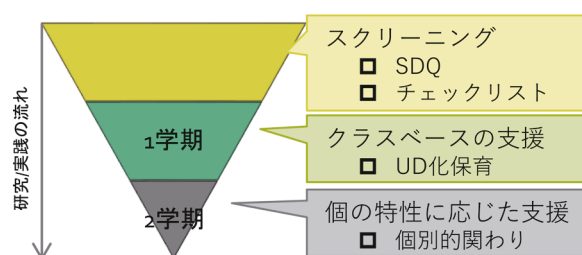


図 1. 早期スクリーニングから効果的な支援につなげる研究実践の流れ

UD化の工夫について高知県教育委員会(2020)によるガイドブックでは5つの領域からの工夫を提案している(図2)。

「環境の工夫」は、教室の構造化や掲示物など集中して活動に向かうための工夫を指し、例えば、学期や1週間、1日の活動の流れなど、マクロ/ミクロな見通しをつける工夫(図3は岩手大学教育学部附属幼稚園での実践)などが挙げられる。「情報提示の工夫」は、指示の具体化や視覚化など子ども達の理解を優先した指示・説明の工夫を指し、例えば、見通しを持って活動できるよう視覚化する、イメージしやすいよう具体的に説明するなどが挙げられる(図4は岩手大学教育学部附属幼稚園での実践)。

「活動内容の工夫」は、子ども達の理解方略の多様性に配慮し多感覚から理解を促すための活動の工夫を指し、例えば、聞く・見る・話す・考えるなどいろいろな活動を取り入れた授業構成にする、順序よく理解できるようスモールステップで活動を構



成するなどが挙げられる。「教材・教具の工夫」は、いろいろな活動を支えるための教材・教具の工夫を指す。「評価の工夫」は、子ども達が頑張ったことやできたことを自覚し自信を持てるような評価の工夫を指し、例えば、努力や成果を積極的に評価する、ハンコやハイタッチなど具体的な評価するなどが挙げられる。

#### 4. 総合考察

本研究では、特別な支援を要する幼児の早期スクリーニングに関する研究について、効果的な実践に向けた研究スキームを作成することを目的とした。

発達障害ではひとりが複数の障害をあわせ有する併存症がみられることがあり、幼児期はそれら障害特性の境界が明確でないことがある。そのため、発達を広く捉える ESSENCE 概念が役立つ。全般的発達のほか、言語・コミュニケーション、社会相互作用、運動の協調、注意機能、活動性、行動、気分、睡眠の領域を広く捉えることで、子どもの特性を包括的に理解することが可能になると考えられる。ESSENCE を捉える評価ツールとして、現場での利用性を考慮すると、SDQ が挙げられる。このツールは保育士／教師が回答し、1 人につき 3 分ほどで記入することができる。分析結果も困難さの程度を 3 段階で表現することから解釈が容易と考えられる。

スクリーニングを活用した実践スキームとしては、スクリーニングから集団／個人の特性を理解した上で、クラスベースの支援—基礎的環境整備—を行う。これは UD 化の工夫に該当し、最も基盤的な支援の工夫となる。この工夫は保育環境を 5 つの領域（環境、情報伝達、活動内容、教材・教具、評価）から捉えることで「全員の参加と理解」を促す工夫を考えることが可能となろう。その上で、個別的な支援—合理的配慮—を行う。ここでは個人の特性に応じた多様な支援が想定される。

今後は、本研究によって作成された実践スキームに基づいた実践研究を行って、特別な支援を要する幼児の早期スクリーニングと効果的な支援のあり方を検討することとしたい。

#### 謝辞

本研究の推進にあたり、岩手大学教育学部附属幼稚園の先生方をはじめ多大なご協力を頂きました。ここに感謝の意を表します。



図 2. UD 化保育づくりの 5 領域  
(高知県教育委員会, 2020)



図 3. 活動の道具と整理する場所との対応の工夫  
(岩手大学教育学部附属幼稚園での実践)



図 4. 活動見通しの視覚化の工夫  
(岩手大学教育学部附属幼稚園での実践)

### 引用文献

- Blom E, Larsson J, Serlachius E, and Ingvar M. (2010) The differentiation between depressive and anxious adolescent females and controls by behavioural self-rating scales. *Journal of affective disorders*, 122, 232-240
- Du Y, Kou J, and Coghill. (2008) The validity, reliability and normative scores of the parent, teacher and self report versions of the Strengths and Difficulties Questionnaire in China. *Child and Adolescent Psychiatry and Mental Health*, 2-8
- DuPaul G, Gormley M, and Laracy S. (2013) Comorbidity of LD and ADHD: Implications of DSM-5 for Assessment and Treatment. *Journal of Learning Disabilities*, 46, 43-51.
- Gillberg C. (2010) The ESSENCE in child psychiatry: Early Symptomatic Syndromes Eliciting Neurodevelopmental Clinical Examinations. *Research in Developmental Disabilities*, 31, 1543-1551
- Goodman. (1997) The Strengths and Difficulties Questionnaire: a research note. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 38, 591-586
- 高知県教育委員会 (2020) すべての子どもが「分かる」「できる」授業づくりガイドブック改訂版. 高知県教育委員会発行
- Marin J, Maganto M, Santana A, Pompa L, Alviani M, Rio C, Duez E, and Bedia R. (2019) Prevalence of psychiatric disorders in adults with autism spectrum disorder: A systematic review and meta-analysis, *Research in Autism Spectrum Disorders*, 59, 22-33